

意味合成と転移修飾*

吉 田 幸 治

1. 序

文を構成する要素のなかで中心的なもののみなされているのは述語動詞である。文の構成をこのように捉える見解は言語学ではもちろん、論理学においても疑問の余地がないもののみなされており、特に言語学においては全ての理論において大前提として仮定されている。

しかし、個々の言語を詳細に検討してみると、動詞一語に概念を記号化する際、つまり語彙化するには、その細部において異同がみられることが知られている。例えば、次の(1)の英語は(2)のように解釈が曖昧になるが、スペイン語ではこれに類似する例(3)は容認されないことが知られている (Talmy 1985, Jackendoff 1990)。そもそもスペイン語では様態と移動を一つの動詞で表すことができないからである。

(1) The bottle floated under the bridge.

(2) a. びんが橋の下で浮かんでいた。

b. びんが橋の下で浮かびながら流れていた。

(3) *La bottella flotó a la cueva.

the bottle floated to the cave

スペイン語では上の日本語と同様に別々の表現をする必要があり (Talmy 1985: 69-70)、一つの動詞を用いるだけで〈様態〉のみの解釈と〈様態+移動〉の解釈の両方を表現することは不可能なのである。

このことから明らかのように、他の言語とは異なり、英語では個々の動詞に本来備わっていないはずの意味要素が一定の条件下で加えられることがあり、こうした現象は Talmy (1985) にならって意味合成 (semantic conflation) と呼ばれる。

さらに、他の言語とは異なる英語の特徴として次のような転移修飾 (transferred epithet) を挙げることができる (Bolinger (1988: 6-11))。

- (4) a. The plane crashed with no apparent survivors.
- b. He held some of the most powerful men in the world at his complete mercy.
- c. We appreciate every automobile you ever purchased.
- d. She lost her first tooth.
- e. John smokes an occasional cigarette.

(4a)において形容詞の“apparent”は直後の名詞“survivors”を修飾しているのではなく、直前の“no”を修飾している。つまり、「明らかに生存者はいなかった」という意味である。同様に、(4b)では“complete”は“mercy”ではなく動詞句全体を修飾しており、「完璧に世界中の強者たちを思うままに掌握した」という意味である。また(4c)では“every”は自動車ではなく「購入行為」を修飾しており、(4d)の“first”は“tooth”ではなく「歯が抜けたこと」を修飾しており、「初めて歯が取れた」という解釈になる。さらに、(4e)は喫煙行為が時々行われることを意味する。

本稿ではこうした意味合成と転移修飾に関して考察を行い、どのようなメカニズムによってこうした現象が行われるのかを示していくことにする。以下、1節では意味合成の事実観察を行い、2節では転移修飾の事実観察を行う。3節ではこの二つの現象の性質上の異同を論じ、そこに関わる文法メカニズムを示す。4節では両現象に対する理論的な説明が依存文法の知見を援用することによって可能であることを示す。5節はまとめである。

2. 意味合成

2.1. 意味合成のタイプ

他の言語とは異なって、英語における意味合成が活発であることは既に多くの学者によって指摘されてきており¹⁾、様々な立場から分析も行われてきている。ここでは吉田(1996)での議論をもとに、まず事実の観察を行っておく。

分析手法によって呼び方や種類が異なるものの、英語では次の三種類の要素が組み込まれることが知られている²⁾。

- (5) a. GO
 b. PUT
 c. CAUSE

それぞれが大文字で示されているのは、これらが音形を持つ要素ではなく結果的に意味として合成される要素であることを示すためである。具体例を見てみよう。

- (6) The knife clattered out of his hand onto the table.
 (ナイフは彼の手から滑って、カタリとテーブルの上に落ちた。)

(国広 (1993 : 20))

- (7) a. The elevator wheezed upward.
 (エレベーターはあえぐような音を出して上昇した。)
 b. A truck rumbled through the gate.
 (トラックがガラガラと音を立てて門を通過した。)
 c. The train whistled into the station.
 (列車は汽笛を鳴らして駅に入った。)

(太田 (1995 : 4))

- (8) a. Sedgwick often clanked into town in sabre and spurs from the cavalry camp.
 (セジュイックはたびたび騎兵隊のキャンプからサーベルと鉄けづめを身につけて、ガチャガチャと音を立てながら街にやってきた。)
 b. She rustled out of the room without waiting for a word from Lind.
 (彼女はリンドからのことばを待たずに、衣擦れの音を立てて部屋から出て行った。)

(Levin & Rappaport Hovav (1995 : 43))

(6)–(8) において用いられている動詞は放出動詞 (verbs of emission) と呼ばれるもので、本来的には音の出る様態を表す。それぞれ、“clatter” は「カタカタと音を立てる」、 “wheeze”

は「ぜいぜいと音を出す」、「rumble」は「ガラガラと音を出す」、「whistle」は「汽笛を鳴らす」、「clank」は「ガチャンと音を鳴らす」、「rustle」は「カサカサと音を出す」という固有の意味を有している。しかし、いずれの例においても主語の移動が組み込まれており、経路(=7b)、着点(=7c, 8a)、出発点(=8b)が適切に表示されている場合には目に見えない GO が合成されていることがわかる。

PUT が合成される例には次のものがある。

- (9) a. ... stubbed out the cigarette.
b. She stood, and turned, angrily shrugging her coat back on.
c. He slammed down the receiver.

(国広(1993: 21))

(9a)では“stub out”に抽象的な PUT が合成されることにより“put out=extinguish”が合成されることになる³。同様に、(9b)では“shrug on”に“put on=wear”の意味が含まれ、(9c)では“slam down”が“put down=lay”を含んでいる。

なお、(9)で用いられている動詞はいずれも他動詞である点には注意が必要である。動詞“put”は命令文が可能であり原則的に三項動詞であることから明らかなように、それ自体の他動性が強く、必ず働き掛ける対象つまり目的語が必要となるからである。

さらに CAUSE が合成される例を見てみよう。動作主が対象となる事物をある状態に至らしめることができれば、それはすべて CAUSE が含まれていると考えられる。したがって、心理動詞(psychological predicate)のほとんどがこれに当てはまることになる。例えば次の(10)である。

- (10) a. John angered Bill.
b. The news depressed Bill.

こうした例に対して Pesetsky (1995) は次のような分析を与えている。

- (11) a. John angered Bill.

- b. John caused Bill to anger.
 c. John anger-cause Bill=John angered Bill.

(Pesetsky (1995))

要するに、英語において目に見えない形で CAUSE が存在していることを示すために、(11a) は (11b) から派生されているものと想定している。つまり、(11c) のように抽象的な述語繰り上げが起こった結果が (11a) だと考えるわけである。

この分析は、ウラル・アルタイ系の言語においては次例 (12) の日本語の「させ」や中国語の「使」のように、使役的な意味内容を表現するためには迂言的な形式が要求されるという事実を考慮すると自然な分析のように思われる。

- (12) a. 太郎は次郎を怒らせた。
 b. 太郎使次郎生气了。

2.2. 吉田 (1996) の分析とその発展型

こうした意味合成に対して、筆者は吉田 (1996: 58) において次の (13) と (14) の結論を提示した。

- (13) 概念構造と統語構造の対応規則：

概念構造は個々の言語の基本統語枠に実時間を反映する形で写像されなければならない。

- (14) 単一節における複数イベント⁴の解釈原理：

複数のイベントが融合される場合、その解釈は動詞とそれに後続する要素の意味的な関係によって解釈が付与される。

(13) における基本統語枠とは [DP+V+XP+YP] のことである。XP と YP にはあらゆる範疇が生起可能なので、学校文法でいう第 4 文型、第 5 文型だけでなく、by 句を後続させる受動文 (John got hit by a car.)、前置詞句が後続する叙述文 (A wildcat is similar to a lion.) など、大多数の構文も含まれることになる。これは英語で利用されている統語枠のなかでもっと

も汎用性が高い。

(14) では「意味的な関係」という部分が重要である。吉田(1996)では議論しきれなかった部分であるが、その後の研究を踏まえて次のように定義しておく。

(15) 単一節内に二つの下位イベント(subevent) α と β が含まれる場合、両者は次の(i)または(ii)のいずれかの意味関係によって関係づけられなければならない。:

(i) 事態 β は事態 α の生起によって自然に予測される事態を表す。

(ii) 事態 β は事態 α の特徴づけを行う事態である。

(15) の(i)で述べていることは、事態 α から事態 β への推移が一般知識に照らし合わせて極めて自然な成り行きであることを要求するものであり、Langacker(1990)のビリヤードモデル、Croft(1991)の因果連鎖(causal chain)などと共通する認識である。(15)の(ii)は事態 α に対して事態 β がさらなる情報を付け加えるものでなければならないことを述べたものであり、Kuno(1990)、Takami(1992)、高見(1995)などで受動文の適格性を説明するために導入されたものである。

(13)–(15)によって意味合成の基本的な線形順序としての条件が示されることになる。具体的には、(6)–(10)において挙げた諸例は全て複数の下位イベントから成っており、先行するイベントが後続するイベントと自然なつながりを持っていることがわかる。一見すると判断しにくい CAUSE を含む(10)の場合も、明示されていないイベント α がイベント β (angerの場合ならば「怒った状態」)を引き起こしているという点で GO や PUT と同じような事態認識となっている。

ここでの議論はひとまず線形順序をもとにしているが、Fujita(1994)あるいは中村(2003)のように、構造にもとづいて意味合成を分析することも可能である。もっとも、句構造にもとづく分析を採用する場合には問題が生じる。この点については4節で改めて議論することにする。

3. 転移修飾

転移修飾(transferred epithet)は別名 hypallage と呼ばれる現象で、これもかなり以前から認識されてきた現象である。具体例として以下のものを挙げておく。

- (16) a. a *drunken* brawl
 b. their *insane* cackle
 c. a *nude* photo of the mayor
 d. a *quiet* cup of tea
 e. your own *stupid* fault

(Huddleston and Pullum (2002: 558))

世界中のどの言語においても修飾語隣接の条件⁵ が強く働くと考えられるが、これらの例では斜字体の語が直後の語句を修飾しているのではなく文によって表される他の部分を修飾しているところが特徴である。しかも、修飾される要素は文内に表されないものもある。例えば (16a) では乱れパーティーに参加している人々が「酔っぼらっている」のであり、(16b) では笑っている人々が「正気ではない」のである。(16c) では写真に写っている市長が「裸」なのであり、(16d) ではお茶を飲む動作が「静か」であり、(16e) は行為の過失の有りが「愚か」なのである。

このように、転移修飾では統語形式を無視するような修飾関係が特徴的であり、そのためしばしば比喩 (metaphor) の一種として捉えられることもある。つまり、比喩的能力を認知作用として用いることによって一部を述べるだけで全てを述べるのが可能になると考えるのである⁶。

たしかに、現象面だけを見ればある種の比喩として捉えられる部分もあるが、転移修飾の場合にも、(4a) のような例を除いて、形容詞は文内に含まれるイベントを修飾するという点にある。つまり、転移修飾では形容詞が副詞的に機能する点が重要であり、この点を説明するには意味合成の場合と同様にイベント構造にもとづく分析が有益であると考えられる。

具体的な分析は次節で行うことになるが、ここでは次のような記述的定式化を与えておく。

- (17) 形容詞は以下の条件で副詞化可能：

当該節内において不可視的な下位事象 (subevent) が存在し、副詞化した形容詞がその下位事象を修飾することが可能な場合

4. 不可視意味要素の依存関係

4.1. 生成文法的分析

意味合成と転移修飾に共通しているのは次の2点である。

- (18) a. 音韻的には存在しない意味解釈要素が関与している。
b. 下位イベントの存在が可否を決定する。

この2点を含めた上で理論的に説明することが必要となるが、ほとんどの先行研究では句構造にもとづく分析が行われている。上でふれた中村(2003)、Fujita(1994)はもちろんのこと、Hale and Keyser(1993)や van Hout and Roeper(1998)においても同様の分析が展開されている。

しかしながら、こうした分析では根拠が薄弱な機能範疇を想定し、さらには反証することが困難な移動を仮定しなければならないなど、問題がないわけではない。とりわけ、本来は意味に属すると思われる問題を AspP のような投射を設定して説明する点など、普遍性の観点からも怪しいといわざるを得ない分析がなされているところに無理があるように思われる。

4.2. 依存文法とその分析

そこで本稿では依存文法にもとづく分析を行い、その妥当性を示すことにしたい。

依存文法は Tesnière(1959)において示された結合価理論に端を発するもので、文の中心要素を動詞と捉え、他の要素を全て補足成分として分析するものである。原子の結合価と同様に、動詞には他の要素と結びつく結合価があると考えられるわけである。

この考え方は米国では等閑視され現在においても顧みられることはほとんどないが、ヨーロッパの国々では研究が継続的に行われてきた。特に旧東ドイツでは Helbig and Schenkel(1978)にドイツ語動詞の結合価辞典としてその成果が結実したように、積極的に研究が行われてきた。

また英国においても Hudson(1984)および Hudson(1990)においてその概要が示され、現在も積極的に研究が進められている。本稿では Hudson の理論を中心に見ていくことにする。

依存文法が他の文法理論と大きく異なる点は次のようにまとめることができる。

- (19) a. 語と語の関係は句構造ではなく、head から dependent への依存線によって示される。
b. いかなる移動規則も仮定しない。
c. 主語に優越性を与えない。
d. 語を基本単位とし、句レベルの範疇は設けず、語と語の関係しか認めない。

e. 深層構造あるいはD構造のようなレベルを仮定しない。

ここで特に注目すべき点は (19c) である。空範疇原理 (empty category principle, ECP) の定義を考えてみても明らかなように、生成文法では主語と目的語の位置づけに違いがあり、主語に対して構造上の優越性が与えられている。依存文法では主語と目的語に対してそのような差は設けないのである。

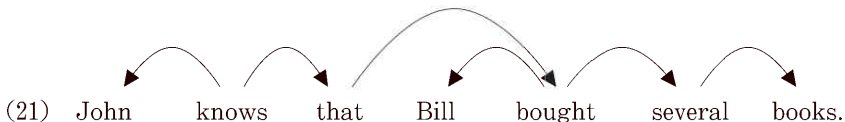
このように、生成文法のように移動や空範疇を設定するなどといった複雑な道具立てや変形操作などを含まない依存文法であるが、語順を保証する原則として唯一設定されている原理が次の (20) である。

(20) No-tangling Principle: Dependency lines must not cross.

(Hudson (1998: 56))

(20) は依存線が交差してはならないことを述べており、この原則の例外となるのは等位構造だけであるとされる。

ここで具体的な分析例を見てみよう。例えば “John knows that Bill bought several books.” は次のように分析される。



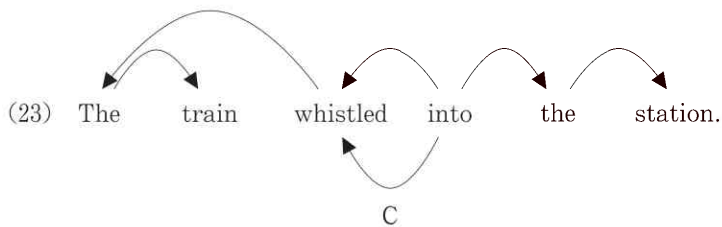
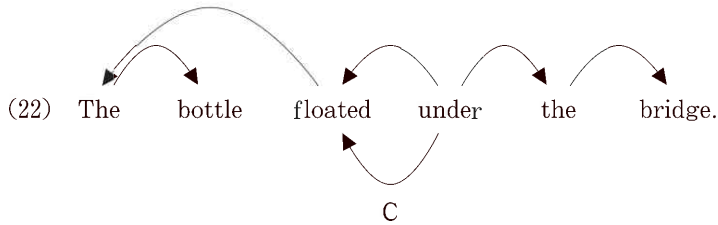
(21) において矢印付きの線は head から dependent に向かうものであって、学校文法の説明で用いられるように修飾語から被修飾語へ向かうのではない点に注意が必要である。

4.3. 意味合成と転移修飾への応用

ここで依存関係にもとづく分析を提示する。まず意味合成について考えてみよう。

意味合成が行われる場合、必ず副詞的な要素が後続することに注目しておかなければならない。例えば (1) では “under the bridge”、(7c) では “into the station” が後続している。念の

ために依存関係を示しておくとならぬようになる⁷。



ここで注目すべきは前置詞から動詞へと向かう矢印が上下に二種類ある点である。意味合成が関与しない場合でも上の依存線が必要となるが、下の依存線は意味合成を導出する推論を保証する意味的な依存線である（Cは conflation を表す）。Hudson (1990) においても意味的な依存線が採用されており、この依存線には語用論的な側面も含まれている。

実は既に多くの研究でも触れられてきているように、意味合成には語用論的含意（pragmatic implicature）が関わっており、この含意は世界の知識に照らし合わせて自然な帰結（natural consequence）となるものでなければならないとされる。

依存文法では認知文法と同様に一般知識と言語知識との間に明確な区別を行わず、統語論の自律性にも拘泥しない。そのため、語用論的知識も同列に扱うことが可能である。(22) と (23) で下方に記されている矢印はそのような意味を含めたものであり、意味論と語用論の接点を包括するものである。

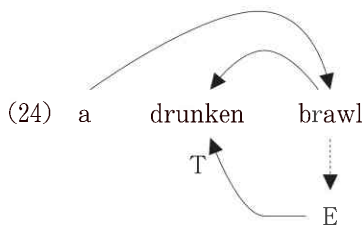
前節で下位イベントの存在が重要であることを示し、(17) のように述べたが、実はこの下位イベントの存在こそが語用論的含意を引き起こすきっかけとなっているのである。したがって、下位イベントの同定が部分的に語用論的な操作によって果されることになる。

次に転移修飾の事例を扱ってみよう。まず基本的な (16) の例から考えてみよう。

- (16) a. a *drunken* brawl
 b. their *insane* cackle
 c. a *nude* photo of the mayor
 d. a *quiet* cup of tea
 e. your own *stupid* fault

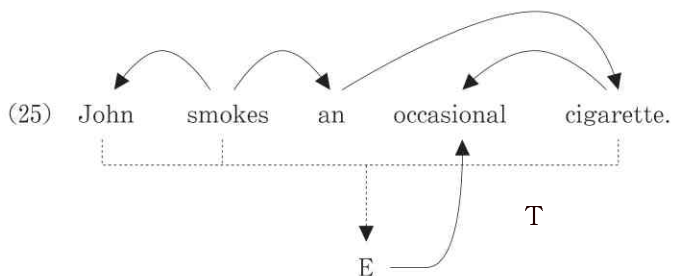
(Huddleston and Pullum (2002 : 558))

いずれの例においても統語的には直後の NP に依存する形になっている。しかし意味的な関係は異なっており、(16a) は次のような依存関係をなしていると考えられる (E=entity, T=transfer)。



ここで破線は語用論的推論を意味し、Eは“brawl”から想起される知識の総体、つまりフレーム的知識⁸を表す。この知識にアクセスすることによって“drunken”が依存することのできる対象、つまり(乱ちきパーティーの)〈参加者〉を確定することが可能になる。

(4e) のような例についても同様の分析が可能である (T=transfer, E=event)。



(25) において、まず点線で結びつけられた “smoke”, “an”, “cigarette” が一つのイベントを形成することになり、この時点では “occasional” は一時的に抑制 (suppress) されている。“smokes an cigarette” がイベントとして確定されると、その時点で “occasional” がイベントを修飾することになる。形式的には形容詞のままであるが、イベントに対して働くために副詞的な解釈を強制 (coerce)⁹ することになる。言い換えれば、イベントとして認識される事態が要求されているわけである。

5. むすびにかえて

世界中のあらゆる言語において意味と形式のミスマッチが生じていることは、これまでの言語学研究において広く知られているところである。意味的側面からみれば「形式のゆらぎ」となるが、形式的側面からみれば「意味のゆらぎ」ということになる。

しかし、本稿で示した分析方法が一定正しいものであるとすれば、こうしたミスマッチの多くは意味的な問題と語用論的な問題の結束点において生じているものであると考えられる。とりわけ、意味合成と転移修飾は形式のすきまをうまく利用し、語用論的な含意から生じたものが慣用化¹⁰ することによって成立しているものと考えられる。

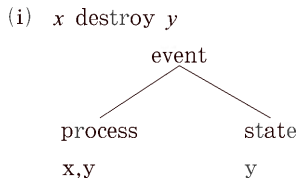
本稿では、意味合成と転移修飾を考察の対象にし、依存文法で用いられる依存線を意味・語用論的に援用することで一定の説明を与えることが可能となることを示した。分析の細部においてさらに検討すべき問題は残っているが、これらは今後の課題としたい。とりわけ、関連する他の現象との比較・検証を通して、推論の様式を明らかにすることは急がねばならない。

注

*本文中の中国語のデータに関して同僚の大東和重氏と須賀井義教氏にご教示いただいた。また、全ての意見を組み込むことができなかったのは残念であるが、本稿脱稿後に同僚の平井大輔氏より貴重なコメントをいただいた。ここで三氏に対して感謝する次第である。もちろん、細部に残る不備および瑕疵はすべて筆者の責任である。

- 1 日本においては Talmy (1985) よりもかなり以前から意味合成と呼ばれる現象に相当する事実は知られていた。毛利 (1999) はその回想録において戦前に東京大学での澤村寅次郎の授業において「色つき表現 (colored expression)」という呼称で類似する構文を数多く学んだことを述べているし、外山 (1961) においても修辭的技法の一つとして取り上げられている。また、原沢 (1955)、国広 (1967) もかなり早い時期から同様の現象に着目していた研究である。

- 2 例えば、Jackendoff (1990) では概念関数 (conceptual function) として GO, STAY, BE, ORIENT, EXT, CAUSE の 6 種類が設定されているが、これは本稿で仮定する意味の合成成分とは異なるものであり、説明対象が異なる。
- 3 近年出版・改訂された英和辞典には “stub out” を成句として載せているものが多い。
- 4 本稿では Pustejovsky (1991) において示されている事象構造にもとづくイベントという用語を援用する。例えば、“destroy” の事象構造は次のように表示される。



何かを「破壊する」というイベントにはその下位イベントとして破壊する「過程」とその結果としての「状態」が含まれ、破壊される対象の y はいずれの下位イベントにおいても「同定」されなければならない。

- 5 修飾語隣接の条件とは「修飾語句と被修飾語句は原則として隣接していなければならない」という語順に関わる原則的条件であり、これに対する例外は極めて少ないことが類型論的調査からも明らかになっている。詳しくは児玉 (1987a)、(1987b)、(1991) を参照されたい。
- 6 この考え方をさらに進めたいうで、意味の転移と換喩 (metonymy) を考察している研究に Nunberg (1995) がある。
- 7 Hudson (1990) では生成文法における DP 分析と同様に決定詞を主要部と考えるので、“The” から “bottle”, “train” に矢印が向かっている点に注意されたい。
- 8 フレーム (frame) に関しては Fillmore (1982) などを参照されたい。
- 9 このように特定の読みを強制する coercion の詳細については Pustejovsky (1995) を参照されたい。
- 10 慣用化されたものが常用されるようになるプロセスを吉田 (2008: 120) では「慣用性の原理」として導入した。

参考文献

- Bolinger, D. (1988) “Ataxis,” 六甲英語学研究会編. 『現代の言語研究』. pp. 1-17. 金星堂.
- Croft, W. (1991) *Syntactic Categories and Grammatical Relations: The Cognitive Organization of Information*. Oxford University Press.
- Fillmore, C. (1982) “Frame Semantics,” In The Linguistic Society of Korea (ed.). *Linguistics in the Morning Calm*. pp. 111-137. Hansin.
- Fujita, K. (1994) “Middle, Ergative and Passive in English—A Minimalist Perspective,” *MIT Working Papers in Linguistics* 22, pp. 71-90.

- Hale, K. and Keyser, S. J. (1993) "On Argument Structure and the Lexical Expression of Syntactic Relations," In K. Hale and S. J. Keyser (eds.) *The View from Building 20: Essays in Linguistics in Honor of Sylvain Bromberger*, pp. 53-109. MIT Press.
- 原沢正喜. (1955) 『現代英語構文の実際的研究』. 大学書林.
- Helbig G. and Schenkel, W. (1978) *Wörterbuch zur Valenz und Distribution Deutscher Verben*. VEB Bibliographisches Institut.
- Huddleston, R. and Pullum, K. (2002) *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge University Press.
- Hudson, R. (1984) *Word Grammar*. Blackwell.
- Hudson, R. (1990) *English Word Grammar*. Blackwell.
- Hudson, R. (1998) *English Grammar*. Routledge.
- Jackendoff, R. (1990) *Semantic Structures*. MIT Press.
- 児玉徳美. (1987a) 『依存文法の研究』. 研究社.
- 児玉徳美. (1987b) 『語順の普遍性』. 山口書店.
- 児玉徳美. (1991) 『言語のしくみ—意味と形の統合—』. 大修館.
- 国広哲弥. (1967) 『構造的意味論』. 三省堂.
- 国広哲弥. (1993) 「日英表現構造の比較」. 『英語教育』42巻12号. pp. 20-22. 大修館.
- Kuno, S. (1990) "Passivization and Thematization," In O. Kamada and W. Jacobsen (eds.) *On Japanese and How to Teach It: In Honor of Seiichi Makino*, pp. 43-66. The Japan Times.
- Langacker, R. (1990) "Settings, Participants, and Grammatical Relations," In L. Tsahatzidis (ed.), *Meanings and Prototypes: Studies in Linguistic Categorization*, pp. 213-238. Routledge.
- Levin, B. and M. Rappaport Hovav. (1995) *Unaccusativity: At the Syntax-Lexical Semantic Interface*. MIT Press.
- 毛利可信. (1999) 『生涯英語教師』. 海川企画.
- 中村捷. (2003) 『意味論—動詞の意味論—』. 大修館.
- Nunberg, G. (1995) "Transfers of Meaning," *Journal of Semantics* 12. pp. 109-132.
- 太田朗. (1995) 「動詞の意味と統語構造—日英語の比較—」. *Studies in English Linguistics and Literature* 12. pp. 1-33. 京都外国語大学.
- Pesetsky, D. (1995) *Zero Syntax: Experiencers and Cascades*. MIT Press.
- Pustejovsky, J. (1991) "The Syntax of Event Structure," In B. Levin and S. Pinker (eds.), *Lexical Semantics*. Special issue of *Cognition*, pp. 47-81.
- Pustejovsky, J. (1995) *The Generative Lexicon*. MIT Press.
- Takami, K. (1992) *Preposition Stranding: From Syntactic to Functional Analyses*. Mouton de Gruyter.
- 高見健一. (1995) 『機能的構文論による日英語比較：受身文，後置文の分析』. くろしお出版.
- Talmy, L. (1985) "Lexicalization Patterns: Semantic Structure in Lexical Forms," In T. Shopen et.al, eds., *Language Typology and Syntactic Description*, vol. 3. pp. 57-149. Cambridge University Press.
- Tesnière, L. (1959) *Éléments de syntaxe structurale*. Klincksieck.

外山滋比古. (1961) 『修辞的残像』. 垂水書房.

Van Hout, A. and Roeper, T. (1998) “Events and Aspectual Structure in Derivational Morphology,” In Harley, H. (ed.) *MIT Working Papers in Linguistics: Papers from the UPenn/MIT Roundtable on Argument Structure and Aspect*, vol. 32. pp. 175–200. MIT, Department of Linguistics and Philosophy.

吉田幸治 (1996) 「動詞とイベントの合成について」. 『語法研究と英語教育』. pp. 49–61. 山口書店.

吉田幸治 (2008) 「尊敬要素「お」と「ご」の認可様式について」. 『近畿大学語学教育部紀要』 8 卷 2 号. pp. 113–125.